〔教育実践研究報告〕

# ３年次、授業終了時の学生の学びからみた機能看護学の統合への課題

栗田　孝子　林　由美子　奥井　幸子　上野　美智子
宮本　千津子　池西　悦子　両羽　美穂子

# The Integration of Students' Learning and the Problem in Management in Nursing When 6 Semester finished

Takako kurita,　Yumiko Hayashi,　Yukiko Okui,　Michiko Ueno,
Chizuko Miyamoto,　Etuko Ikenishi, and Mihoko Ryoha

## はじめに

機能看護学講座では、看護を発展させる理論と方法を機能看護学として探求しており、その構成要素をマネジメント・人材育成・情報として授業展開をしている。特に機能看護学は、他の大学に無い本学独自の授業科目であり、学問領域としても新たな看護学の構築と考え、これを検証していくことは、今後の看護学の発展に必要不可欠と思われ、授業に関する様々な報告をしている[1)～6)]。

機能看護学の授業は図１に示すとおり、１年次から順序性をもち、各学年での学修が看護職となる人材の育成として、その都度の知識にとどまらず、既修学修を積み重ね統合することによって、本講座のめざす卒業生像に近づくと考えている。そのため学生の身に落ちる教育を常に心がけ、学生が自ら考え問うことを繰り返し、学修を統合して、一人ひとりが良い看護を実行する人材に育つことを狙っている。

今回、報告する『組織とマネジメント』（以下授業科目を『　』で表示する）は、機能看護方法３として３年次に位置づけ、この３年次までを機能看護学の必修科目として、全学生が受講することとしている。

そこで、この３年次授業『組織とマネジメント』の終了時点で、機能看護学として、学生の中で統合しているのか、検討し授業課題を探りたい。

## Ⅰ．目的

『組織とマネジメント』の授業終了時に、学生は学びをどのように活用しようと考えているのかを明らかにするとともに、その活用が既修した機能看護学の学びを想起し統合しているか検討し、機能看護学の授業課題を探ることを目的とする。

用語の定義：「統合」とは学生の記述の意味内容において、１年次からの既修した学修の意味内容が複合、或いは繋がって表記されたものをいう。

## Ⅱ．方法

### 1. 対象

15 年度に機能看護方法３『組織とマネジメント』を受講した学部学生 75 名のうち、授業終了時点で課したレポート「組織とマネジメントの学びを今後、看護専門職としてどう活かしていくかについての考え」を本研究目的で使用することに同意を得た 74 名の記述内容を分析対象とした。

### 2. 分析方法

記述内容を熟読し、意味内容を類似性に従い整理分析した。その後、授業の主な構成要素に分類した。データの抽出及び分類にあたっては、研究代表者が行い、共同研究者間の合意が得られるまで検討をかさねた。

### 3. 倫理的配慮

課題レポートの活用について、文書及び口頭で研究目

岐阜県立看護大学　機能看護学講座　Management in Nursing, Gifu College of Nursing

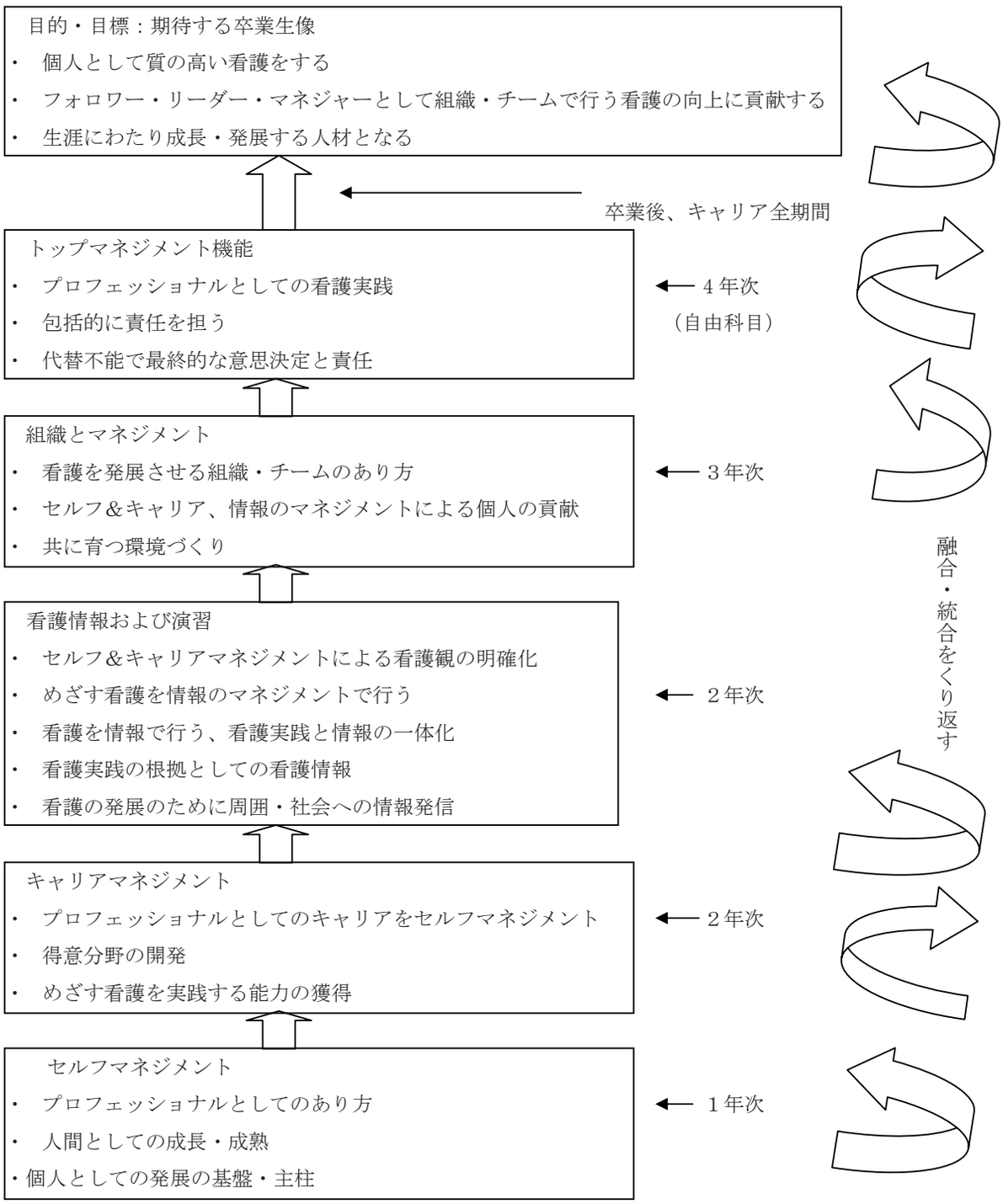


図１　機能看護学の授業の目的・目標・エッセンスと融合・統合のプロセス

的を説明し、プライバシーの保護について及び協力の可否によって、評価等の不利益を被らない旨の説明を加え、その上で各学生の意思表現として同意書の提出を求めた。同意書の提出については、他の学生に意思が明らかにならないよう配慮し、BOXへ投入してもらった。

## Ⅲ．機能看護学の授業構成

１．機能看護学の目的・目標・エッセンスと融合・統合のプロセスは、図1に示すとおりである。なお、各学年の授業展開と課題については報告[7)～11)]しており、ここでは割愛する。

２．組織とマネジメントの授業構成[12)]

１）目的

優れた組織・チームに共通する条件を理解し、個人が組織･チームの一員としての貢献について考える。また、これを考えるにあたり既修学修を活かし理解を深める。

2）授業方法

課題：授業開始前の課題の掲示

「領域実習の場で組織・チームを体験し、良い組織の条件は何か」を考える

（1）導入：授業目的と進め方

テーマ：A　組織とマネジメント

（2）講義：よい組織・チームの条件及び個人の貢献

看護組織の具体例

（3）グループワークA：文献・資料・授業開始前の課題学修も含め､実習体験から課題をもとに検討する。グループワーク課題は①組織と個人、②チームワークと個人プレイ③個人の組織・チームへの貢献とした。

（4）講義：病院看護部の実例（看護部長・看護実践スタッフ）

（5）（6）（7）グループワークA

（8）講義：企業の実例（地元会社社長）

（9）交流グループワーク：グループ間での意見交換

（10）グループワークAのまとめ

テーマ：B　常時・非常時におけるマネジメント（アポロ13号から学ぶ危機管理）

（11）（12）（13）グループワークB

グループワーク課題は①３人を生還させた要因と改善すべき点

（14）課題学習：①学修した内容について、テーマを設定し意見を述べる。②『組織とマネジメント』の学びを今後、看護専門職としてどう活かしていくかについて、意見を述べることをレポートの課題とした。

（15）講義：トップマネジメント機能

総括

## Ⅳ．結果

組織とマネジメントの学びを、今後どう活かしていくか、という問いに対し学生の記述内容は、表1に示すとおり要約すると375記述あった。それを分類すると134サブカテゴリーと48のカテゴリーに分類できた。以下カテゴリーは【　】で示す。

これを授業の主な要素でみると「組織・チームとマネジメント」に関する記述、「情報」に関する記述、「キャリアマネジメント」に関する記述、「キャリア・セルフマネジメント」が複合された記述､「セルフマネジメント」に関する記述、「非常時のマネジメント」に関する記述があった。

中でも「組織・チームとマネジメント」に関する記述は187あり、サブカテゴリー58、カテゴリー25に分類できた。

「組織・チームとマネジメント」に関するカテゴリーでは11カテゴリーがチームに関するカテゴリーであった。

「情報」に関する記述は12サブカテゴリー、５カテゴリーに分類でき、そのカテゴリーの意味は【情報を扱うときの配慮】と【一貫した看護実践に向けての情報の共有】でそれぞれ９記述あった。

「キャリアマネジメント」に関する記述は17サブカテゴリー、７カテゴリーに分類でき、そのカテゴリーの意味は【専門職としての良い看護の追究と実践】で12記述あった。

「キャリア・セルフマネジメント」に関する記述は11サブカテゴリー、３カテゴリーに分類でき、そのカテゴリーの意味は【資源活用による自己成長と専門性の向上】で19記述あった。

「セルフマネジメント」に関する記述は31のサブカテゴリー、７カテゴリーに分類でき、そのカテゴリーの意味は【セルフマネジメントの実行】【自己の目標管理】

表１　『組織とマネジメント』学びの活用

| カテゴリー | サブカテゴリー | 記述数 | 授業の主な要素 |
|---|---|---|---|
| 組織理念を理解し自己目標の保有 | 2 | 8 | 組織・チームとマネジメント |
| 自己の価値観を認識し理念と照合 | 1 | 3 | |
| 看護の基盤として組織理念の明確化と自己目標との一致 | 3 | 9 | |
| 組織員としての自覚と自己目標の保持 | 2 | 2 | |
| 理念の吟味は自己行動の基準 | 3 | 11 | |
| 理念の共感・共有 | 3 | 9 | |
| 理念・目標に向かい一貫した実践 | ● 2 | 16 | |
| 看護専門職として組織理念に基づいた役割の実行 | ● 6 | 21 | |
| 自ら資源になる組織貢献 | 3 | 6 | |
| 人材育成による組織づくり | 4 | 15 | |
| メンバー間の信頼関係をきずく | 2 | 9 | |
| 組織・チームへの貢献 | ★ 3 | 18 | |
| チームワークは良い看護実践の条件 | ★ 3 | 8 | |
| チーム員としての自覚と実践 | ★● 2 | 2 | |
| チームで看護する意味を考えた行動 | ★● 1 | 3 | |
| 個人プレイとチームワークの相互作用 | ★ 2 | 4 | |
| チーム員としての自己管理・自己責任 | ★ 1 | 1 | |
| 目標・評価をチームで共有した看護実践 | ★● 1 | 3 | |
| 個人がチームに活用されることでの看護の質向上 | ★ 1 | 2 | |
| 職種の役割と協働による看護実践 | ● 2 | 3 | |
| 職種の専門性を活かした連携 | 1 | 8 | |
| 役割認識と責任ある言動・行動によるチームへの貢献 | ★ 1 | 3 | |
| チームの関わりによる他者への影響 | ★ 3 | 5 | |
| チーム員を尊重する関係づくり | ★ 2 | 4 | |
| 組織と個人の相互影響 | 4 | 14 | |
| 情報を扱う時の配慮 | 4 | 9 | 情報 |
| 相互理解のための組織・チームの情報共有 | 2 | 8 | |
| 連携をはかるための情報共有 | 1 | 2 | |
| 一貫した看護実践に向けての情報の共有 | ● 3 | 9 | |
| 情報のマネジメント | 2 | 5 | |
| 専門性を強化する自己成長 | 1 | 1 | キャリアマネジメント |
| 看護観の形成 | 2 | 2 | |
| 望む看護実践に向けた職場選定 | 1 | 2 | |
| 達成感のある看護実践 | 2 | 2 | |
| 専門職としての良い看護の追究と実践 | ● 6 | 12 | |
| 看護実践のための自己成長 | ● 4 | 7 | |
| キャリアアップ | 1 | 4 | |
| 資源活用による自己成長と専門性の向上 | 7 | 19 | キャリア・セルフマネジメント |
| 目的達成に向けたセルフマネジメント・キャリアマネジメント | 3 | 9 | |
| マネジメントを続け他者を尊重する環境づくり | 1 | 1 | |
| 自己の成長 | 4 | 13 | セルフマネジメント |
| 主体性の認識と行動 | 3 | 11 | |
| 自己理念の形成 | 1 | 2 | |
| 自己の基本的姿勢 | 8 | 15 | |
| 価値意識の重要性の認識 | 5 | 12 | |
| 自己の目標管理 | 5 | 16 | |
| セルフマネジメントの実行 | 5 | 18 | |
| 非常時のマネジメント | 5 | 9 | 非常時のマネジメント |
| ４８カテゴリー | 134 | 375 | |

注）★はチームに関すること、●は看護実践や行動に関する記述を表示

【自己の基本的姿勢】でそれぞれ 18､16､15 記述あった。「セルフマネジメント」に関する記述はカテゴリー数に比べ記述数が 87 記述と多かった。

「非常時のマネジメント」に関する記述は５サブカテゴリー、１カテゴリーで９記述あった。

カテゴリーの意味から特徴をみると【看護専門職として組織理念に基づいた役割の実行】や【理念・目標に向かい一貫した実践】【職種の役割と協働による看護実践】等のように看護実践や行動としての意味の記述が多く見られた。また、【看護専門職として組織理念に基づいた役割の実行】や【役割認識と責任ある言動・行動によるチームへの貢献】等１つのカテゴリーの中に複合的な概念を含む記述があった。

## Ⅴ．考察

### 1. 学びの活用

『組織とマネジメント』の学びを、48 のカテゴリーで示すとおり、学生は多面的で幅広い活用を記述していた。記述内容を機能看護学授業の主な要素から考えれば、「組織・チームとマネジメント」に関わる事柄、「情報」に関する事柄、「キャリアマネジメント」に関する事柄、「キャリア・セルフマネジメント」の複合的な事柄、「セルフマネジメント」に関する事柄、「非常時のマネジメント」に関わる事柄であり、これは機能看護学の１年次から３年次の各セメスターでの全ての学修内容を示している。

また、学生の記述数を見ると、【看護専門職として組織理念に基づいた役割の実行】が最も多かったが、これは『組織とマネジメント』の授業で、組織の理念を考えることや、理念の実行に向けた活動を、重視したことが一因と考える。学生は組織理念を、概念的に捉えるだけでなく、【理念の吟味は自己行動の基準】として考え、理念に向かう看護実践としての活用や【自ら資源となる組織貢献】【組織・チームへの貢献】【専門職としての良い看護の追究と実践】、或いは【セルフマネジメントの実行】等、自らの行動としての活用が多く記述されたように、実行の意味を重視し、かつ看護専門職としての役割を認識し、既修の学修も合わせ、学びを活かそうと考えている。

また、チームに関するカテゴリーも多く認めたが、学生の立場で領域実習においてチーム員としての体験も合わせ、想像し考えやすかったことも含め、【チームワークは良い組織の条件】として考え、【チーム員としての自覚と実践】として、役割を果たすことに活用を考えている。

「キャリア・セルフマネジメント」に関わる学びの活用は【資源活用による自己成長と専門性の向上】に見るように、専門職として、或いは人として、自己の望む看護や自己目標に向け、自らの姿勢をつくり成長させていくことと考えている。

これらのことは、機能看護学講座の授業は１セメスターの概論の当初から、自らの考えを自らの言葉で説明することを、学生に求めてきたことや、グループワークの中で､文献と領域実習の体験を重ねて考えたこと等が、自分自身の問題となり、消化を助け自己の身に落とした結果、既修した学修が、学生の中で重なり幅広いカテゴリーに結びついたものと考える。

### 2. 機能看護学統合への課題

カテゴリーを授業の主な要素から見ると、「組織･チームとマネジメント」に関するカテゴリーが他の授業要素より多く 25 項目であった。これは直近の授業であったことに加え、10 月まで領域実習があり、この場で、身近に組織やチームを体験したこと、10 月の領域実習開始前に、「良い組織の条件とは」を実習をとおして考えてくるという課題をだし、動機づけをしたこと、学外から授業協力者として、地元病院の看護部長と同じ組織に所属する看護実践者、及び地元企業の社長の日常活動を聞く機会を設けたこと等、これらの全てを活用しグループワークを重ね、学生自身が考えた過程が学びの内容として、抽出されたものと考える。

「セルフマネジメント」に関わる記述は、７カテゴリー、31 のサブカテゴリー 87 記述で、「キャリアマネジメント」に関わる記述は、７カテゴリー 17 サブカテゴリー 30 記述を抽出した。セルフマネジメントは１セメスター、キャリアマネジメントは４セメスターの開講科目であるが、「セルフマネジメント」に関わるサブカテゴリーは少ないが、記述が多いことをみると、学生の考えが凝集された結果と考えられる。つまり１セメスターの授業として､コアとすべきものが教員の中で明確にされ、学生に伝わったことと、３年間の授業の中で機能看護学

の主柱、或いは土台として、各セメスターで学びが想起され、凝集していったものと考える。

その反面、「キャリアマネジメント」に関わる記述については、17 サブカテゴリー 30 記述で、【専門職としての良い看護の追究と実践】の記述数が多く集約され、学生は自らの進むべき道として認識しているが、【専門性を強化する自己成長】【看護観の形成】等それ以外のサブカテゴリーの記述数は少ない。

このことは、２年次での授業は、看護専門職としてのあり方を醸成し、向かう方向を考える機会となっているが、専門職としての自分の姿として投影しにくく、考えにくい面があると考えられる。本紀要に“看護職者の体験談を取り入れた授業によるキャリアマネジメントについての学び”の中でも報告しているが、授業を振り返ると、キャリアマネジメントは、看護専門職としての成長を考える者と、人生としての成長を考える者があり、両者の関係が混在し、学生は捉えにくかったのかもしれない。今年度は、キャリアマネジメントを、看護専門職として考えることを検討し授業を開講しているので今年の結果も踏まえ、今後の検討課題としたい。

学びの活用で記述したが、多くのカテゴリーが抽出され、また、その意味内容は１年次から３年次までの機能看護学が含まれている。また、１つカテゴリーの中に、複合的に授業の要素が含まれるものもある。例えば【役割認識と責任ある言動･行動によるチームへの貢献】は、活用として抽出したため、方法では分類しなかった。そのため「組織・チームとマネジメント」に関わると分類しているが、記述の意味は、チームへの貢献のための役割認識は、専門職としての役割であり、責任ある言動行動は自らの姿勢としての姿と解釈でき、セルフマネジメント、キャリアマネジメントの概念が含まれている。これは、『組織とマネジメント』の授業は、１年次からの授業を活用し、３年次の授業で各セメスターの学修内容が､浸透し統合していく意味を持っているものと考える。

以上のように、『組織とマネジメント』の授業であっても、抽出されたカテゴリーは機能看護学であり、学生の中にはそれぞれの科目としての学修にとどまらず、機能看護学として既修の学びを積み上げ、かつ組織とマネジメントの中に、既修学修を包含しており、統合されてきているものと考える。

## Ⅵ．結論

３年次の授業終了時における学生の学びを記述内容から見ると、１年次から３年次の既修した学修の意味内容が含まれ幅広いもので、機能看護学として統合しつつある。さらに機能看護学として統合するために４セメスターの『キャリアマネジメント』のコアを明確に学生に伝えることが授業課題であった。

## 参考文献


1）宮本千津子，上野美智子，栗田孝子，他：セルフマネジメントを主題とした授業の展開と課題，岐阜県立看護大学紀要，2(1)；175-181，2002.

2）両羽美穂子，篠田征子，林由美子，他：セルフマネジメントについての学生の学びと看護専門職における意義，岐阜県立看護大学紀要，3(1)；75-81，2003.

3）両羽美穂子，上野美智子，栗田孝子，他:機能看護概論 ( セルフマネジメント ) における３年間の取り組みと課題，岐阜県立看護大学機能看護学講座　教育と研究，1(1)；6-10，2003.

4）岩村龍子，大川眞智子，篠田征子，他：キャリアマネジメントを主題とした授業の展開と課題，岐阜県立看護大学機能看護学講座　教育と研究，1(1)；11-22，2003.

5）栗田孝子，林由美子，奥井幸子，他:『組織とマネジメント』授業の展開と課題－マネジメント授業の構築に向けて－，岐阜県立看護大学機能看護学講座　教育と研究，1(1)；23-31，2003.

6）宮本千津子，上野美智子，栗田孝子，他：“機能看護方法４看護情報学”の実際と課題，岐阜県立看護大学機能看護学講座　教育と研究，1(1)；17-22 ，2003.

7）前掲 1).

8）前掲 3).

9）前掲 4).

10) 前掲 6).

11) 前掲 5).

12) 前掲 5).


（受稿日　平成 17 年２月 28 日）